

早稲田大学博士論文(概要)		
	学位記	文科省報告
2004	3896	甲 Z1969

博士（人間科学）学位論文 概要書

現代フランス社会における伝統文化のリバイバル
—ラングドック地方の事例をめぐって—

Revival of Traditional Culture in Modern French Society
: on the case of Languedoc

2005年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

出口 雅敏

Deguchi, Masatoshi

研究指導員：蔵持不三也 教授

本研究は、現代社会における「伝統文化のリバイバル」という近年の現象を理解することを目的としている。

この現象は日本に限るものではない。たとえば、フランス農村部や山村部でも、ここ数十年、こうした現象が生起していると指摘されてきた。そこで本研究では、日本の文化人類学研究においてヨーロッパ地域を調査対象地とした研究蓄積が少ないという現状も鑑み、フランス南部ラングドック地方を調査対象地として選び、この「伝統文化のリバイバル」という現象の理解に取り組んだ。

1960・70年代頃から顕著となったフランス農村社会（農村世界）の変容については、これまでも、人文地理学者のベルナール・ケゼール（B. Kayser）が本のタイトルにも冠した『農村ルネッサンス』、あるいは、農村社会学者のアンリ・マンドラ（H. Mendras）が命名した『第2次フランス革命（1965～1984）』、と、様々な呼び方がなされてきた。本研究は、これらのフランス農村社会研究に多くを負った「フランス農村文化研究」として位置づけている。すなわち、彼らによって示された「フランス農村社会の変容」を、「フランス農村文化の変容」という文脈に移し変えて理解しようと試みたものである。

さて、このフランス農村文化の現代変容を理解するために、本研究では具体的な事例として、南フランスのラングドック地方の「伝統的祝祭（動物祭）」を取り上げた。それは、「動物の張りぼて」を町のエンブレムとして練り歩く祭礼である。

19世紀末、この地方では多くの「動物」が村むらで確認されていたが、第二次世界大戦前後には、ほとんどが消滅してしまった。しかし、それらは、1960・1970年代頃から再び復活する気運をみせ始めた。そこで本研究は、ラングドック地方における「伝統的祝祭の変容」の諸相を歴史的・具体的に追った。

調査を通じて、とくに、以下のような点について明らかにしようとした。すなわち、「伝統文化のリバイバル」という現象を理解するためには、「近代の徹底化」という観点を踏まえる必要がある。そのために、現代フランス社会においてリバイバル化する村の伝統文化が、いかに近代特徴を有しているかを明らかにする必要がある。そしてまた、現代社会における祭りの果たす役割、シンボルの象徴的効果と政治性、伝統的祝祭（動物祭、漁師祭）という象徴的場面で社会的ポジションをめぐって交渉がなされていること、などのを明確化である。

じっさいに、こうした「伝統文化のリバイバル」の内側に入り込んで、今日における「伝統的祝祭の姿」を理解するために、動物祭の1つ、「メーズの牛祭り」についての現地調査を実施した。

この動物祭は、じつは近年のリバイバルによって再生あるいは誕生した「動物」ではない。この動物祭についての文献初出は17世紀であるが、おそらくは、

さらに遡った中世の頃から、続けられてきた祝祭である。とはいえ、だからこそ、この動物祭の歴史的変容を追うことで、つまり、「かつての牛祭り」と「現在の牛祭り」の比較を通じて、今日の動物祭の変容を理解する手がかりが得られると考えた。

現地調査を踏まえた考察においては、以下の点を強調した。すなわち、伝統的祝祭と近代的祝祭の相違に着目して、メーズの動物祭の変容を整理し、さらに、「伝統的祝祭の変容」をまとめた。その上で、メーズの牛祭りのみならず、伝統文化のリバイバルの中の今日の動物祭は、すなわち、「伝統的」という名を冠した「近代的祝祭」であり、その象徴的意味は（部分的に）脱意味化

(*dé-sémentation*) され、スペクタクル化される、「民俗化された祝祭 (*La fête folklorisée*)」とすることができるとした。この民俗化された祝祭は、「見させる (*faire-voir*)、信じさせる (*faire-croire*)、集団を存在せしめる (*faire-exister le groupe*)」という現代の祝祭を典型的に示していると言える。またそれが、他の祝祭、いわゆる「イベント」と異なるのは、「伝統的」という名の「集団の過去」「集団的記憶」との関係が認められるからである。

「伝統主義の誕生」について、エリック・ヴェイユはかつて、それはすなわち伝統や文化から「自律した主体の誕生」と言った。本研究のテーマである「伝統文化のリバイバル」という文化現象も、じつは「文化」と私たちの「関係」を語っている。それは、近代性（モデルニテ）に深く刻印された「私たち自身の『文化』に対する関わり方（の変容）」についての理解、という点で示唆的ではないだろうか。私たちと「伝統」や「文化」との、様々な関係、その多様性や複数性を、豊かに描いてゆくこと、これを今後の課題として最後に示した。